



「社会経営ジャーナル」論文

| | |
|----------------|---|
| 論題=Title | 音と共同体 |
| 著者=Author | 坂井 素思 |
| 雑誌名=Citation | 社会経営ジャーナル,2015, Vol.3, p.41-53 |
| 発行者=Publisher | 放送大学社会経営研究編集委員会 |
| ISSN | 2188-1073 |
| 巻=Vol. | 3 |
| ページ=pages | 41-53 |
| 発行年=Issue Year | 2015 |
| URL | http://u-air.net/SGJ/pub/20151101J-Sakai.pdf |

音と共同体

坂井 素思

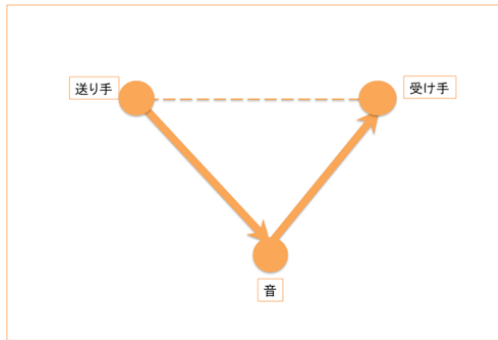
1 共同体をあらわす「音」の現象

音というものが、もし社会的な意味を持っているとするならば、それは原理的には音の送り手と受け手との間に、「呼応関係 (call and response relationship)」という、音の手段による、あるいは音を媒介とする、習慣的な人間関係が形成されるという現象が見られるからである(図表1参照)。ここでは、音を出すだけでなく、音を受け、それに応える相互作用の関係が人びとの間に生ずることが重要である(ナティエ1987)。「呼べば応える」ことが、音や声において行われているのが、共同体における人間社会である。もちろん、共同体の応え方には消極的な「感受」から積極的な「応答」に至るまで、また個人レベルの反応から集団レベルの反応まで、さまざまな形態が存在するのも確かである。それらの呼応関係は、必ずしも耳に心地よく伝わるような、意図的に作られる「音楽」や「言葉」だけで行われているわけではなく、むしろさらさらと流れる「水」や、パチパチと火花

を散らす「火」などの自然で原初的な音が送り出され、身体全体で体感される場合も多い。そして、これらの音が人びとの間を、つまり送り手と受け手の間を、あるいは受け手同士の間を媒介していくのである。また、雑音や騒音のように、社会の中で消極的な効果が媒介される場合も見られる。

音は遮断する壁のようなものがなければ、周りの人びと全員に届いてしまうという、人びとの間の社交性を惹起するための基礎的な特性を持っているから、この集団への特性を利用して、音が利用される場合が多いといえる。もちろん、音の結ぶ関係は、音に対して音が返されるような相対(あいたい)的な呼応関係はその一部でしかない。音に対する反応は、音だけでなくその他、感情や身体的な反応などの多くのレスポンスを用意しており、その場では直接的な呼応関係が存在せずとも、その後間接的な呼応関係が存在する場合もある。事故を示す半鐘などの「音」が聞こえてきて、警告ということが伝わり、その後になって事故の重要さがわかってくることのような音の使われ方はよく見るところである。

わたしたちの身の周りには、社会で共通に伝えられる音が存在する。地域の共同体全体に伝わるような、そして時には共同体を包み込むように聞こえてくる音が存在し、その音に反応して人びとは活動を起こす。



図表1 音における「送り手」と「受け手」の呼応関係

たとえば、港で靄のかかったときに聞こえる「霧笛の音」、朝や晩に響いてくる「寺の梵鐘」や「教会の鐘」、定時を知らせる「工場のベル」、救急車や消防車が通り過ぎる時の「サイレンの音」などがある。これらは、地域全体に響く音であり、地域の共同体や宗教上の教区がむしろこれらの音で区画されているとさえ認識される現象も存在する。これらの音は人びとの間で、それが無意識的であったり意識的であったりさまざまな反応を示すが、これらの音によって呼応した社会の人間関係が浮き彫りにされるのである。

今日では、近代化が進んで、機械音や工場音や交通音、とりわけエンジン音や航空機音に邪魔されて、静かな環境で「共同体の音」を共通に聞くことができなくなっている。そして、共同体へのレスポンスも弱くなってきている。あるいは、「共同体の音」それ自体も、騒音として規制されてきている地域も存在してきており、「共同体の

音」の弱体化は避けられない状況が生じてきている。けれども、それにもかかわらず、明らかに同じ地域、同じ時間に、同じ音を共通に持ち合うという現象は、現代にあっても、「鐘の音」が奏でる「除夜の鐘」に代表されるように、意識的・無意識的に存在している。

中世の村の中で「鐘の音」が届く範囲を示す言葉として、「鐘下（かねした）」がある。「何かある際には、鐘が連絡用に用いられた。村の寺自体が村人の紐帯としての役割を持ったが、こうして寺の鐘が連絡用の道具としての役割を負ったことにより、この鐘の聞こえる範囲が、そのまま共同体として大きくまとまった。そうした言葉が『鐘下（かねした）』である」と記されている（笹本1990）。

ここで問題となるのが、なぜ個人として受け取った音が「共同体の音」として集団で感知されるのか、なぜ人びとが共通の意味のある音として、認識するのかという、音に対する集団的感性の問題である。たとえば、毎日同時刻に聴こえてくる「寺の鐘」で、時間感覚を保っている集落は数多く存在するだろう。もっとも、それが今日では、ラジオやテレビの時報、さらにインターネットのデジタル時計に移り変わってきているという違いがあり、また影響を及ぼす範囲の違いは存在するが、個人は同時間に同空間に存在する人びととの間で、「時の音」を共有する共通の感覚をもっている。

2. 「共同体の音」としての「鐘の音」

共同体すべての人にとって、共通の感性を提供するものの典型例として、この「鐘の音」が存在していたとする証拠を、フランスの歴史社会学者コルバンは挙げている。「フランスに現在残っている鐘楼をみても、かつてはときに12ないし18個の鐘から構成されていた一組の鐘がどんなものであったのか、理解することはできない。全部の鐘が響きわたって大気が震えると・・・人びとは他のことにはまったく注意を向けられないくらいの一種の眩暈を覚えたものである。このような衝撃を与えるのは、時間的な隔たりと、感覚の支配力の衰えをきわめて強く知覚したことから感じる態度である」ということを引用している（P. 27）。個人的な感性を揺るがせて、集団による感覚支配力を眩暈のように受け取っていたという証言である（コルバン1994）。一斉に鳴り響く教会の鐘や、除夜の鐘が寺々で響かせる音に、わたしたちは歩みを止め、それに聞き惚れることがある。一つの「鐘の音」があたかも人びとの心の中に「鐘の音」があるかのごとく、自然に共鳴するのである。

また、サウンドスケープ論のM・シェーファーは、「音響共同体」というものが存在していたとして、次のような指摘を著書『世界の調律』で行っている。「（キリスト教の）教区もまた、かつては聴覚的なもので、教会の鐘の音が届く範囲によって定義されていた。教会の

鐘が聞こえなくなれば、教区から出たことになる。今でもロンドンっ子（コクニー）といえ、東区でも特にボウ・ベル（セント・マリー・ル・ボウ教会の鐘）が聞こえる範囲に生まれ、そこで一生を暮らす者を指す（P. 433）」という、典型的で有名な例を指摘している（シェーファー1994）。もちろん、これらは「鐘の音」に関する、いわば紋切り型の感性の反応であって、これらに単純化されるわけではないことに、コルバンは注意を喚起している。感性の力を過信すると、何か「鐘の音」に絶対的な神秘的力が存在していると考えてしまうような、社会科学のロマン主義的な罠にかかってしまう可能性のあることも否定できない。しかしながら、じつは「鐘の音」が人びとの感性に、共通にかつ直接的に、影響を与えていることは否定できない現実の歴史が存在する。

この点は、日本の寺における「鐘の音」でも同様である。日本で聞くことのできる「鐘の音」の歴史は、現存する梵鐘に限れば、西暦698年の飛鳥時代に制作された鐘に始まる。現在京都の妙心寺に伝わる、この最古の鐘については、徒然草（第220段）に記述が残っている。それ以前にも、古墳時代の銅鐸や大陸からの銅鐘は存在するが意匠が違う。歴史上重要な点は、「鐘の音」というものが、時計やメディアが発達する以前に、「鐘下」の例に見られるように、共同体全体に響き渡る「音」としての人びとの感性支配力を持っていたと考えられる点である。

3. 「共同体の音」の感性支配力

ここで問題となるのが、上述したように、なぜ個人として受け取った音が、「共同体の音」として感知されるのか、なぜ個人一人一人の感覚は個別の認識をするにもかかわらず、「鐘の音」については人びとが共通の意味のある音として認識するのかという、音に対する集団的感性の問題である。

なぜ集団が「鐘の音」を同じ音として受け取るのかという、一つの理由は、「送り手」からの物理的な特性が同じであるということがあがる。あとで詳細に見ていくように、「鐘の音」は毎回撞かれるたびに、一定の振動数・周波数（ヘルツ）群で一定の音圧・音量（デシベル）群で押し出されるから、受け手は同じような物理的特性に対して、耳から脳に至る生理的な反応を示していることになる。けれども、問題なのは、同じ物理特性があったとしても、同じ感覚を持つかどうかはわからないという点である。その「鐘の音」が高い音なのか低い音なのか、柔らかい音なのか硬い音なのか、温かい音なのか冷たい音なのか、などなど個人によって異なり、集団として同じに感じるとは必ずしも言えない場合もある。小説家ディケンズの『鐘の音』では、主人公の意識が変化すれば、同じ「鐘の音」も異なって聞こえることが描かれている。

しかしそれにもかかわらず、この物理的振動が集団の人びとに共通

音として認識される事例も挙げられている。『平安京：音の宇宙』を著した中川真は、儀礼における「人と神とのコミュニケーション」に注目して、打楽器の振動波が人びとの身体に「共振作用（resonance）」を及ぼすとする、ニーダム説を紹介している。打楽器の物理的な衝撃波の繰り返しが、人びとに憑依、つまりトランス効果を生じさせると考えられるとした。けれども、この考え方にしたたとえば、楽器奏者のドラマーはいつでもトランス状態に陥ることになるが、必ずしもそういうわけではない。中川が言うように、「打楽器による興奮作用は、生理的に完全にオートマチックなものではなく、学習によって得られる文化の一部と捉えたほうが、その意味について深い理解がもたらされるであろう」という指摘が妥当性を持っている。

つまり、共通音として聞こえるもう一つの理由は、「受け手」の問題である。ここで、「鐘の音」についての受け手の学習というプロセスが存在する。とりわけ、ここでは集団としての同じ音であると考えることができる、社会的関係がフィードバックされ、後天的に学習されない、「鐘の音」の意味が同一であるとする認識が成立しないだろう。ここには、音が発せられた後に、受け手の側のプロセスが介在することが推測される。ここで、集団の何人かの人びとが一つの音を共通認識する過程の典型例をみてみたい。

メディア論のマクルーハンの考え方に、ホット・メディアとクール・メディアの議論があり、「鐘の音」は最もシンプルなメディアで

あって、このクール・メディアの典型例であるといえる。たとえば、彼の分類によれば、ラジオは熱いメディアで、電話は冷たいメディアであり、映画はホット・メディアで、テレビはクール・メディアである。ホット・メディアとクール・メディアは、メディアを分類する質的な視点を提供している。ここで、「熱い (hot)」と「冷たい (cool)」を区別する原理は何なのだろう。メディアに乗るデータが密なのか粗なのかによって、ホットで「高精度 (high definition)」なデータなのか、それともクールで「低精度 (low definition)」データなのかの違いがあるとする。明らかに「鐘の音」はクールである。とくに、注目したいのは、メディアの及ぼす参与性の違いである。たとえば、写真と漫画を比べてみたい。この両者では、明らかに写真のほうが高精度のデータであるので、ホット・メディアである。漫画に比べて、多くの情報を得ているので、受け手の側の想像力の発揮すべきところが少ないとされる。これに対し、漫画の情報量は、低精度であるため、読者の想像力を総動員させられるために、参与性が強く働く。とりわけ、相手との間での双方向的な参与性に違いがあるという点である。低精度のメディアであれば、受け手の側の重要性が高まることになる。参与性が強ければ、わたしたちの集団的な生き方に依存することになる。

マクルーハンの考え方で、「鐘の音」メディアが関係する、もっとも注目すべき点は、今日のわたしたちの日常生活にも影響を及ぼして

いる考え方であって、「内爆発 (implosion)」と呼ばれている。内爆発とは、機械技術が社会発展をもたらすとする「外爆発」という従来からの考え方を、根本的にひっくり返すもので、内部からの発展が全体の発展を進める傾向である。「鐘の音」は、技術的にはそれほど複雑なものを持っているものではない。けれども、共同体の人びとに対する感性影響力には、絶大なものがある。

近代になって、機械技術が発展し、社会のなかでそれらを産業に応用する傾向が表れた。このため、このような19世紀型の機械文明が広がり、この機械がわたしたちの意識を統御する考え方、すなわち外爆発 (explosion) が起こったと考えられてきた。産業革命の流れとして、外爆発が位置づけられる。ベルトコンベアが流れ作業を進行させ、産業革命が発展していくという、イメージが優越する。ここでは、科学技術の発見と、機械技術の発明とが、累積的に生じ、このような技術的な発展が人間労働を細分化し、外側からの発展が生じたと考えられてきた。

これに対して、技術発展の多くは、機械のみによってもたらされたものではなく、その道具としての特性は、むしろ人間の身体や感覚を拡張させるという方向を取っているとする。技術は、身体や感覚と合体して、内爆発を起こして、中枢神経組織を地球規模に拡張していると考えられている。テレビやラジオが地球上のあらゆる情報を収集し、目と視覚の拡張が起こったと同様にして、「鐘の音」は耳と聴覚

を刺激して、人間の身体と感覚を拡張することに役立ったのである。この事例は、フィードバックが繰り返されることで学習が進み、雑音が「意味ある音」に構成されることを典型的に示している。そしてまた、音による共通の記憶が、共通認識をもたらし、人びとを結びつけることを示している。

4. 「鐘の音」にはどのような特性があるのだろうか

「鐘の音」の魅力は、一瞬にして、遠くの人びとと近くの人びと共に音を届けることができるという点にある。人びとの聴覚という感性へ共通のシンボル信号として、直接届けられることで、集団共通の認識が得られる。このような「鐘の音」に、三つの特性があると考えられる。一つには、多数の人びとに対して、同時に音を届けることができるという、人びとの間での音の「同時間性」があり、二つには、多数の人びとに対して、つまり遠くの人びとへも近くの人びとへも、ある一定の範囲の人びとを包み込むような音の影響力を行使するという、人びとの間の「同空間性」があり、さらに三つには、音が人びとの間に介在して、全員に対してなんらかの影響を与えることになる、「介在性」という性質がある。

第1に、「鐘の音」には、人びとの間の「同時間性」という特徴が顕著に見られる。音が集団を支配する力を持っているのは、瞬時にし

て、一つの意味を届けることができるからである。ミレー作の「晩鐘」は、「鐘の音」の同時性を絵画として表している。この絵の右手奥の教会から「鐘の音」が聞こえてきて、はるか離れた教会と、この農民が祈っている畑とが、同時間的な祈りを可能にしていることが理解できる。

また、上述のコルバンは、「鐘の音」がフランス農村のアイデンティティを形成するとする伝統的な考え方を紹介している。これに寄ると、「鐘の音によって限定される地域は、美をめぐる古典的なコードや揺りかご、鳥の巣、窪み（いずれも古典的な田園風景の要素）といった図式に対応している。この地域は、中心部から出る音によって規定される閉じられが空間にすぎない。実際、この視点に立てば、鐘楼がその音域の中心に位置していることが重要になってくる。・・・

(中略)・・・すくなくとも田舎において、19世紀の鐘は、聴覚が断片化された断続的な物音しか知覚しえないような空間を定めていた。そのような物音のどれひとつとして、鐘楼の音の支配に対抗することなどできはしない (P.132)」とする(コルバン1994)。人びとの感性へ有無も言わずに、ダイレクトに音として伝えることができるのだ。この支配力は、圧倒的であって、理性で話し合いによって成し遂げるような支配とは異質の支配に成功している。田舎の静寂の中で、鐘の音は唯一、同時間的に音を伝達できる手段として、他を圧倒していた。

たとえば、「鐘の音」以外のもので、時刻を知らしめることを考えてみれば、「鐘の音」がいかに優れた同時間性を発揮するメディアであったかが理解できる。中世から近世にかけては、もちろん通信手段は限られており、もし「鐘の音」が使えなかったら、どのような手段で時刻を知らすことができたのだろうか。紙媒体を手渡しで回し、視覚によって時刻を知らせる場合を考えてみれば、その不便さは想像できるだろう。

5. 「鐘の音」の同空間性と聴覚空間

第2に、「鐘の音」が共同体の音として支配力を持つようになったのは、同じ空間内において、人びとの聴覚へ訴える力を持っていたからである。人びとの間における「鐘の音」示す「同空間性」が重要である。ここで注目しておきたいのは、音波の持つ規則的な到達力は威力を持っているという点である。上述の歴史社会学者コルバンは次のように指摘している。「鐘は音の規則性によって、定期的に『周囲の空間に聖性をあらためて付与すること』に貢献している。住民の信仰がどのようなものであれ、教会は村のなかにおいて、たいていの場合尊重されるミクロ空間を規定する。まさにこの保護された沈黙の中心からから鐘の音波が発するのであり、それが、他のあらゆる喧噪から守られた『神聖さ』の影響をおよぼすのである (P.134)」とする(コ

ルバン1994)。このように、鐘の音を定期的に響かせることの効果によって、その音の到達する空間が、神聖な空間として、人びとの感性のなかに認識されることになると考えられている。個人の感性はそれぞれ異なっても、「神聖さ」という共通の意味をその音が聞こえる範囲の人びとは共有することになるのである。聖的な共通空間が、そこに形成されるとみることができる。

したがって、この「鐘の音」は、どこからでも聞こえるという機能を有している必要があった。コルバンは上記の宗教的な空間的意味に加えて、物理的な空間に関わるものとして、「鐘の音」を考えている。「鐘は、割り当てられた管轄区域の境界線の中では、どこからでも聞こえるようではなければならない。すでに指摘したように、それは鐘の音量を小教区や町村の面積に、そして地形上の性質に合わせるということを意味する。『鐘は山岳よりも平地のほうが遠くまで聞こえるし、谷間の鐘は平地の鐘よりもさらに遠くまで聞こえることが指摘された』とレミ・カレは1757年に記している。起伏の多い地形では、音量の大きな鐘が必要であり、同時に鐘による通知を早く行なう必要がある。1837年の規則によると、ピレネー地方の谷間においては、ミサの鐘はその儀式が始まるよりも1時間前に鳴らしてよいとされた。1885年の規則によると、オート＝サヴォワ県ではこの1時間という猶予でも不十分とされた」と指摘している(コルバン1994)。「鐘の音」が人びとへ共通に届くに至るには、つまりは、同空間性を保つには、

それなりの「鐘の音」における工夫が凝らされているのである。

たとえば、日本の鐘撞（かねつき）は、三つの部分に分かれていて、人びとへ対しての圧倒的な伝達力を有していることがわかる。第1に、ゴンという、撞木が鐘を撞いた直後の打音、つまり「アタリ」の部分がある。第2に、これに続き、ゴオーと聞こえる、数秒くらいの音が、多彩に構成される複合音で、これが「オシ」である。このオシの部分が重要で、遠くまで届くので遠音とも呼ばれる。そして、第3に「オクリ」部分で、オオーンという、長く減衰しながら数十秒続く音で、ほぼ単一の振動数音からなる。「余韻」を形作る重要な部分がある。結城浩徳は、永観堂の梵鐘データを公開して、周波数が135ヘルツを基調音としているが、さらに8本の主たる周波数を観察している。これによれば、アタリの後、5秒くらいまでオシが生じ、その後オクリに受け継がれていく様子が見える。

このように鐘撞された「鐘の音」は、聴覚空間を圧倒的に支配できるという、音特性を持っていることがわかる。聴覚空間（oral space）とは、縦軸に音の大きさ（音圧）を取り、横軸に音の振動数（周波数）を取ったものである。ここでどのくらいの範囲で支配力を持つのかによって、感覚へ与える影響が異なってくる。人間は、音圧について20デシベルから130デシベルの大きさの音を聞くことができ、周波数について20ヘルツから20キロヘルツの音を感じることができる。そして、「鐘の音」の支配力は、人間の聴取可能領域

の多くをカバーしているという性質を持っている。このことをわかりやすく言い換えるならば、「鐘の音」は100デシベルの大きな音で、遠くの人にも近くの人にも迫ることができるし、20ヘルツから900ヘルツに渡る多彩な音色をもつことによって、低い音に聞く耳を持った人にも、また高い音に聞く耳を持った人に対しても、共同体の幅広い聴覚の持ち主に対して万遍なく、等しく迫ることができる。この結果から考えるに、「鐘の音」は大きな音だから、多くの人びとに伝わるだけでなく、多彩で多様な音色を持つから、また多くの人びとの耳に多様に対応することができるから、利用されるのである。圧倒的な感性支配力の中身が、極めて高い次元にあると認識できるだろう。つまり聴覚空間を描いてみるとわかるように、「鐘の音」は聴覚空間上の点や線として、存在するのではなく、まったく次元の異なる「面」として存在していることが理解できる。このため、「鐘の音」は同空間のなかで、圧倒的な感性支配力を持つことになる。

6. 「鐘の音」の介在性とシンボル性

第3に、「鐘の音」の特徴として、人びとの間で見られる音の介在性という点を見ることができる。「鐘の音」が人びとの間に介在して、記号やコミュニケーションの手段として、現れてくる場合が存在する。ときには、これらの音は合図のための記号やコミュニケーショ

ンの手段として現れるが、さらにそのためだけでなく、もっと伝達者や被伝達者の心の奥にまで入りこむような、象徴的な意味を持つ場合がある。画家コロー作の「ドゥエーの鐘楼」では、絵画に描かれた鐘はこの街全体の象徴として、最も高い塔に納められており、大きな音の「鐘の音」を出すことが許されていて、街すべての人びとの心を支配している様子を描き出している。

また、コルバンは、次のような鐘の象徴性の例を提示している。「鐘は誇りの対象である。共同体どうしの階層列序の他の極においては、たとえばマントリュの住民は、自分たちの住む部落が町の一部分にすぎないのに立派な鐘を所有しているということを、たいへん名誉だと感じていた。1858年、寄付金によって購入された1500キロの鐘は、シジーの小教区の信者たちの自慢であった。その地方の住民たちは、シジーの鐘の響きの大きさと美しさに感嘆して、その鐘に「谷間の美女」というあだ名をつけたほどである。（「美女」となるのは、鐘clocheというフランス語が女性名詞だから）」ということである（コルバン1994）。19世紀のフランスの町にとって、鐘は地方自治体が持つべき必須の施設であったと考えられている。役所の近くには、共同体の必須施設の機能として、裁判所や登記所、軍隊や市場と並んで、教会とりわけ鐘が一組必要であると考えられていた。

このことは、「鐘の音」が「共同体の音」としてシンボル性を持っているということである。「鐘の音」が単に物理的な音以上に、ある

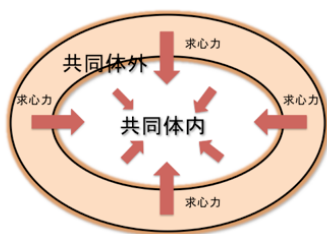
いは集団の中において、記号や信号以上の意味を持っていることをみるには、音の持つシンボルという意味を理解することが重要である。ここで「シンボル」とは、音が何かを指示する記号や信号以上の、それからはみ出す豊かなものを含む場合に現れる現象である。集団に対して、「鐘の音」やサイレンなどの音が利用されるのは、まさにこのような記号から溢れ出る、受け手の感性に対して、合理的な記号としての意味以上の感性上の情動や感情そのものや、さらには感性的思考を伝えることができるからである。

心理学者のユング著『人間と象徴』では、「言葉やイメージは、それが明白で直接的な意味以上の何ものかを包含しているときに、象徴的なのである。それは、より広い『無意識』の側面を有しており、その側面はけっして正確に定義づけたり完全に説明したりされないものである」と、シンボルについて述べられており、これに対応して、如何にしてこのシンボルが集団の中に侵入するのかについて、以下のとおり、二つの可能性があるとして上述のM・シェーファーによって考えられている。

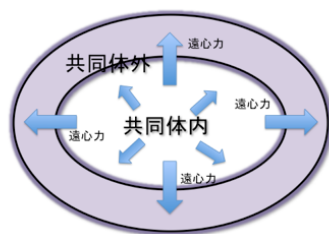
個人の意識・無意識に働きかけて、その上でさらに、最終的な集団内部に音が侵入する仕組みについては、この象徴作用は有効である。音の象徴作用には二つの機能があると、シェーファーは指摘する（図表2参照）。二つとは、求心性（集める力）と遠心性（散らす力）である（P. 353）。これらの作用がシンボルとしての繰り返しの中で、

音以上の意味を持つようになる。たとえば、シェーファーは求心性機能を持つ「ベル」の例として、トンガとフィジー諸島の礼拝堂のベルをあげている。このベルを鳴らすことによって、礼拝堂に集まることを知らなかった人びとにも、ベルの音によって注意を喚起する効果があるのだ。そして、人びとを一箇所に集める機能を果たしていることになる。

「音の共同体」における求心力



「音の共同体」における遠心力



図表2 「鐘の音」の求心力と遠心力

また、遠心性の例として、バンクーバーにおける「天然痘の犠牲者を運ぶ馬車につける小さなベル」をあげている。馬車が道すがら、通行人にベルの音で、この馬車には近づいてはいけないことを知らしめている。これらの求心性や遠心性の例については、感性に訴えることで、自動的に情報提供ができることがメリットとなっている。

ここで重要な点は、求心性にしても遠心性にしても、もし単なる記号や合図として、ルールの意味を伝えることができたとしても、それ

はルールの意味を合理的に理解している人びとの間だけで、可能であるにすぎない。けれども、ここでルールを知らなかった人びとの範囲にまで、ベルの音が届き、音による感性支配が行われる点が重要である。音が無い状態と比べて、音は人びとの感性に訴え、人びとを動かす力を持つことになる。つまりここで、1回限りの音の作用が生ずるのでなく、音の繰り返しによって、単に音が聴こえる以上の意味が追加されるのを見ることができる。

この例は、特別な事例であると思えるが、「鐘の音」の求心性の事例として、日本中世史の笹本正治は、「鐘の音」の持つ、「この世とあの世を繋ぐ」役割に注目している。もし「あの世」があるならば、現在生存する人びとの共同体の外側に、あるいは潜在的なところに存在することになり、普通の世界にある共同体とは断絶している。けれども、「鐘の音」による「死者に逢う」機能が発揮されることで、死んだ者と会うことができるとする。この例として、京都知恩院の鐘をあげている。「この寺（知恩院）の本堂の東南にある鐘を旧暦7月9、10の両日（現在は8月9、10日）に撞くことを「迎え鐘」といい、聖霊（ここでは死者の霊）を迎える風習がある。お盆であの世からこの世いやってくる死者の霊を迎えるのに、鐘の音が効力を持つというわけである」と指摘している。

また、「鐘の音」が共同体の内と外をつなぐ役割を持っていたとする考え方があり、このことも「鐘の音」が特別な音を持っていたから

可能であったことである。定期的に鳴らされる鐘とは別に、一度だけ不定期に鳴らされる鐘には、時報や宗教上の役割とは別に、誓約や裁判、そしてさらには「この世とあの世」をつなぐ目的で、葬儀の際に鳴らされることもあったことを、上述の笹本正治著『中世の音・近世の音』は示している。

7. 共同資源としての「鐘の音」

これまで見てきたように、「鐘の音」は、西洋においても日本においても、まずは「宗教的な音」として役割を持ち、またその後「共同体の音」として成立してきている。たとえば「時の鐘」などのように共同体における欠くべからざる「共同資源 (common resource)」として、日常の音のなかでも「公共的な意味」を持つものとして考えられるようになってきた。近世になるにしたがって、音が送り手と受け手との間の呼応関係を形成することが、時刻を合わせて行う場合に不可欠のものと考えられるようになった。労働や経済取引などの集団行為が増大し、時刻というものは「公共財」の価値をもつに至っており、その手段としての「時の鐘」はこれを実現する「共同資源」として存在すると考えられる。

江戸時代には、「時の鐘」が宗教音から独立して、共同体の中で位置付けられた。典型的には、「時の鐘」による江戸の時刻制度が有名

である。1626年（寛永3年）日本橋の本石町に「時の鐘」を知らせるための鐘撞堂が置かれたのを始めとして、上野寛永寺、芝増上寺、浅草寺などの12から15箇所の「時の鐘」が設置された。そして、2時間おきに一日12回鐘が撞かれていた。このような音環境は、芭蕉の有名な句にも反映されている。「花の雲鐘は上野か浅草か」という句は、深川に住んで、江戸を歩いていた芭蕉の音景色を反映している。

注目すべきは、「時の鐘」の管理運営体制が制度として成立しており、恒常的な公共財として維持されていた点である。「時の鐘」は鐘の音であり、生活音と同じように、身近な音として聞こえてくるのだが、生活音と異なって、ある共同体に共通に鳴り響き、共通の意味を伝えるものとして、つまり生活に不可欠な時刻を告知する「共通資源」として機能していたことを見ることができる。この共同資源には、人びとに共通に、時刻通知という恒常的な「社会的便益」をもたらすと同時に、その共同体全体に対して、継続して蓄積されていく「社会的費用」がかかってくることになる。ここで、音は空気や水資源と同じように、自然の中で手に入るから、無料（タダ）の、費用のかからない資源であると考えられている。ところが、実際には多くの音源に、意識的無意識的な費用がかかっており、多くの音は水資源と同じように、水道の水がほぼタダのような値段しかかかっていないように思えるが、実際には、ダムを作ったり水道管に費用がかかったり

するのと同様に、遠くへ音を伝えるためには高台の鐘撞堂が必要であったり、定時に鳴らすためには鐘撞人を雇わなければならなかったりなどの費用がかかっていることになる。

『江戸の時刻と時の鐘』浦井祥子著は、江戸の「時の鐘」を描き、これによって人々は時刻を知ることができたとする。鐘撞役辻源七の由緒が残っており、当初江戸城内にあった「時の鐘」が、1626年（寛永3）に日本橋本石町3丁目の土地に移転された。この鐘撞役は、「時の鐘」が聞こえる範囲にある町の住人から、1ヶ月銭4文ずつの「鐘役銭」を徴収する権利をもち、これが「時の鐘」の運営資金となった。

「時の鐘」の運営には、三つの方式が混在して存在した。第1の方式は、町方から鐘撞料を徴収して、鐘撞が行われた方法がある。今日の認識に当てはめれば、時刻報知サービスの対価として、それを利用していた町方の費用負担が、利用料金として集められたのである。第2の方式は、幕府から補助金が出て、幕府の管轄のもとで運営が行われたものである。第3の方式は、共同体の一部として鐘撞体制が考えられ、「株」が発行されて長期的な制度維持を行う基礎となっていた。これらの境は曖昧であるが、第1の方式は公共財的な性質のある「時の鐘」にとっては継続することがたいへん難しいものであることが確かめられる。

このようにして、「鐘の音」は人間が産み出した音であるが、この音が人びとの間に習慣として定着することによって、逆に「鐘の音」

が人びとを効果的に、共同体組織に結びつける潜在的な役割を担うのを見ることができる。オーケストラの各パートがうまく有機的に構成されると、良い音楽が生み出され、今度は逆に、その音楽に媒介されて、オーケストラの組織化がうまくいく効果を、組織論では「オーケストラ効果」と呼んでいる。「鐘の音」は公式的な組織ではそれほど貢献しているわけではないものの、非公式なところにおいて、「共同資源」として共同体を下支えして、潜在的オーケストラ効果を発揮しているのではないかと考えることができる。このようにして歴史の中には、「鐘の音」のように、共同体の音を体現するような事例を見ることができる。音は人間が生み出し、人間はそれを聴くのだが、その中でも特別な音は、逆に人間を組織化して、音の社会を作り出している。

参考文献

1. Jean-Jacques Nattiez(1987), *Musicologie générale et sémiologie*, C. Bourgois, ジャン=ジャック・ナティエ(1996) ; 足立美比古訳, 『音楽記号学』, 春秋社
2. Alain Corbin (1994) , *Les cloches de la terre : paysage sonore et culture sensible dans les campagnes au XIXe siècle*, (L'évolution de l'humanité, . Bibliothèque de synthèse historique) , Albin Michel, ; A・コルバン(1997) ; 小倉孝誠訳, 『音の風

景』, 藤原書店

3. 笹本正治(1990), 『中世の音・近世の音 : 鐘の音の結ぶ世界』, 名著出版

4. 浦井祥子(2002), 『江戸の時刻と時の鐘 (近世史研究叢書, 6)』, 岩田書院

5. R. Murray Schafer(1977), *The tuning of the world*, Knopf, 1st ed;

R・マリー・シェーファー(1986); 鳥越けい子 [ほか] 訳, 『世界の調律 : サウンドスケープとはなにか』 (テオリア叢書) 平凡社; のちに、平凡社ライブラリー版(2006)

6. 中川真(1992), 『平安京 : 音の宇宙』 平凡社 ; のちに、平凡社ライブラリー版(2004)